

テレビドラマの図書館員 『もう一度君に、プロポーズ』を中心に

——図書館はどうみられてきたか・13——

佐藤 毅彦

How librarian is shown in the TV drama :
The Case of “I will propose to you once again.”

——Images of Library (13) ——

SATO Takehiko

Abstract : Although the contents of services at public libraries are changing due to the wide spread of the Internet and the worsening of local finances, the reporting about libraries in the media does not reflect these changes. The librarian in TV drama, “I will propose to you once again” is engaged in holding “book recitation sessions” for children. In the drama, however, there are few portions in which the librarian’s reaction to the new environment or a future possibility is depicted impressively, while the image of the conventional library is conspicuous.

要約 : インターネットの普及と地方財政の悪化により、公共図書館の業務やサービス内容は変化しているが、メディアにおける図書館の取り上げられ方はそれを反映したものになっていない。テレビドラマ『もう一度君に、プロポーズ』の図書館員は、児童を対象とした「朗読会」の開催に取り組んでいるが、新たな環境への対応や将来的な可能性を感じさせる部分が少なく、従来の図書館のイメージが強く反映されたものとして描かれていた。

1. はじめにー文芸作品における図書館に関する記述の事例：女性作家の描く図書館・2012

文芸関係雑誌で図書館に関する記述がみられる例として、2012年10月現在、月刊誌『みすず』に、宮田昇のエッセイ「図書館に通う」が連載中であるが¹⁾、さらに、同誌には、2012年8月号より、辻由美のエッセイ「図書館の可能性」の連載が開始された²⁾。また、長期にわたって同誌に連載中の、大谷卓史「メディアの現在史32」では、2012年6月号において、「図書館戦争」というタイトルで、図書館とプライバシーをめぐる現代の状況について、武雄市の市立図書館業務委託問題や、図書館貸出記録の扱いについて、「図書館の自由に関する宣言」にもふれながら、論じている³⁾。

文芸作品については、複数の受賞歴があり、現在でも精力的に執筆活動を行っている女性作家の単行本で、図書館や図書館員を登場させた作品が、2012年に、複数、刊行されている。

1-1. 川上弘美『七夜物語』⁴⁾

『七夜物語』上巻は、「第一章 図書館」というタイトルが付された章からはじまっている。メインキャラクター

である「鳴海さよ」は小学校四年生になったばかり(上 p.11)、学校の図書室では、「さよの貸出カードは五枚めで、灰田くんのほうはすでに十枚をこえている」(上 p.27-28)。この学校図書館には、担当者がいて、「『鳴海さんは、同じ本をくりかえし読むのね』司書の西先生に、さよはついこの間言われた」(上 p.34)「二人がひそひそ話していると、司書の西先生が声をかけてきた。『二人は、友だちなおのね』少しばかり意外そうに、西先生は言った」(下 p.207)というシーンがある。

区立図書館である「樺野区立第一図書館」は、学校の図書室よりも規模の大きい施設として描かれている。「学校の図書室も好きだけれど、このごろさよは、家から歩いて二十分ほどのところにある区立の図書館にも、ときどき行くようになった」(p.34)。「樺野区立第一図書館」は「三階だて」で「学校の図書室よりもずっと本の数が多いので、さよは図書館に来るたびに、わくわくする。でも、さよは図書館の本を借りない。図書館に来ていることは、母にはないしよだから」(p.55)、さよは、本を持って、二階にある学習室へ行って読む。「学習室の中はとて静かだ」という。

この図書館で、さよは、『七夜物語』という本にめぐり合う。それは「いったん本を閉じて棚にもどし、図書館を出たが最後、その日に読んだ『七夜物語』のなかみを、さよはまったく思い出すことができなくなってしまふ」「ふたたび図書館にやってきて棚から本を引き出したとたんに、さよの記憶はよみがえってくるのだ」(p.60)という本だった。さよは、学校図書館でよく会う、同級生の灰田くんを、樺野区立第一図書館へ連れてゆき、この物語のストーリーに入り込んで行く(p.163)。

学校の図書室は子どもたちが日常生活を送る学校の中での存在であり、より規模の大きな区立図書館は『七夜物語』という神秘的な非日常的ファンタジーへの入口として、ストーリーの背景に登場している。

1-2. 村山由佳『ダンスウィズドラゴン』⁵⁾

この作品の図書館は、井の頭公園の森、自然文化園の門をくぐった先に存在する「おそろしく古い」「石と木と鉄で造られた、中世の教会を思わせる建物」(p.7)である。「廊下は、床が磨き上げられた御影石で、両側の壁と天井は漆塗りだった。頭上の梁のそれぞれに」「ラテン語の標語らしきものが刻まれ、あるいは太い石柱や窓の縁取りや、とんでもなく高い折り上げ天井などのそこかしこには、凝ったレリーフがほどこされて」(p.10)おり、館長室については、「部屋の壁は」「ほとんどが古い書物で埋まっている。背表紙をざっと見渡しただけで」「売るとしたら対価は天文学的な数字になるだろう」(p.12)と記されている。

「滝田オリエ」は、募集広告をみて、「この司書として働かせて頂きたい」(p.16)と、図書館へやってくる。館長は、「『この図書館の開館時間は、夕方の五時半から翌朝の午前九時までなのです』」(p.20)と説明する。

読書室は、「巨大な空間」で「吹き抜けの高い天井」があり、「四方の壁を覆う書棚のすべてが、びっしりと本で埋め尽くされ」「回廊はカタツムリの殻の内部のように螺旋系につながって、すべての書棚を無駄なく見てまわることができるように配慮されていた。手すりは黒い鋳物製で、そこにも繊細な唐草模様と空想上の生きものたちの装飾が施されていた。天井の中央にはまるでバチカンの大聖堂のようなドームが配され、宗教画のかわりにガラスがはめこまれていた」(p.31)。オリエは、それをみて、「司書の資格を取って間もない頃」に訪ねた「ニューヨークの市立図書館」の「読書室」に「高い天井からシャンデリアがぶらさがり、重厚な木製の机が定規で線を引いたように整然と並んで」いて「席ごとに真鍮のスタンドが用意されていた」ことを思い出した。「この部屋は、造りこそあの図書館とよく似てはいるがさらに広い」(pp.32-33)と感じる。また、「白っぽい大理石のリファレンス・カウンター」では「頭上の、石灰石でできたファサードのような部分に、ラテン語の標語が刻まれていた」(p.34)。

この図書館にあるのは「空想上の生きものたち」や「この世ならざる者たちについて書かれた書物が、書架のおそらく半分以上」で「中でも最も充実しているのは『龍』または『ドラゴン』に関する資料だった」(pp.45-46)。「いにしへの書物ばかりを集めた図書館」には、オリジナルの古文書、手書きの写本、ゲーテンベルグの発明から間もない時代の貴重な印刷物(p.71)などが存在する。

このストーリーに登場する図書館は、古い幻想的な建物で、ファンタジー的なストーリーの舞台装置である。測りがたいほどに広大で、ニューヨークの公共図書館にたとえられる、その図書館は、夜間だけに開館するという設定で、多数の写本や初期の刊本を所蔵しており、空想上の動物、中でも龍(ドラゴン)に関する資料を多く

所蔵している。現代の社会に存在する現実の図書館とはかなり違っているが、図書館という施設が、これまで受け継いできたイメージがその背景となっているといえよう。

1-3. 小池昌代『厩橋』⁶⁾

『厩橋』には、東京の区立図書館に勤務する女性職員の日常生活が描かれている。「坂下黎子」は、「厩橋の西側、隅田川沿い」(p.8)のマンションに居住し、「勤務先、本所図書館」(p.62)に通勤しており、「来館者は、ほとんどが近辺に住む地域住民」(p.64)である。「結婚して三十年近くがたち、知り合ってから、ほとんど五十年」(p.56)という夫との関係から、この小説のメインキャラクターである「坂下黎子」という人物は、五十代の女性で、区立図書館に勤務しているという設定であることがわかる⁷⁾。

図書館員になるきっかけとして、「文学にはたいして造詣があったわけではなく」「近代文学など、興味もなかった」(p.26)黎子だが、小学生のころ「よく通う地域の図書館」の「一階にあった、子供図書室にはとても素敵な女性司書がいた」(p.58)というエピソードが挿入されている。「髪を短く切りそろえた、優しくりりしい女性だった。いつもたいてい、カウンターに座っていて、子供たちの本選びの相談にのったり、質問に答えたりしていた。彼女の姿が見あたらないとき、黎子は子供ながらに、がっかりしたものだ」「黎子が本を差し出すと、その司書は、『いつも、とても面白い本を選んでるわね、どういうふうの本を選んでるの?』と尋ねてくれ」黎子が答えると「司書の女性は、うんうんとうなずき、黎子の言葉を聞いてくれた。あんなにうれしかったことはない」「本なんて、一人で読み、一人で完結する世界だと思っていた。そこに思いがけず、介入してきた人。それが図書館の司書だった。本という世界を共有し、それについて、語り合える人、そんな人がいたならば、黎子はきっと、自分が幸せになれるような気がした」(pp.58-59)と感じていた。「あの人だわ、あの司書の女性が自分を司書の仕事へ、導いてくれたのかもしれない」(p.60)。「高校生のときは、先のことなんてまるで考えていなかった。周りに同調して、ただ大学へ入っただけだ。大学へ入ったら、司書の資格をと考えただけ」(p.97)ということだが、小学生時代の体験が、自らの職業選択に影響していると、現在は、感じている。

図書館員として、館内での業務を行っている場面はいくつかあるが、そのうちのひとつは、カウンタ業務である。「日頃、黎子は借り出される本の一冊一冊に、格別に注意を向けることはない。本にはどこか、その人の精神性が付着するものでもあるし、それについて、具体的に話題にするのも、その人の心の内側をのぞきこむようなことになる」「カウンターに持ち込まれた本に関して、借り手とのあいだに、余計な話題を持たないように注意していた」(p.66)が、対岸のマンションに居住しているのではないかと思われる男性利用者に対して、ことばを交わしてみたいと感じ、「行き過ぎかもしれない興味を育てているのは」「黎子自身だった」(p.67)。「スドウ・カイトロウ＝須藤海太郎」(p.67)という、この人物が借りた本が、古い美術展のカタログ、『世界文学全集第Ⅲ集』(副題は「短篇コレクション」)、日本近代文学全集・樋口一葉の巻、『簡単! 料理の基本』、『ガラスのうさぎ』(pp.68-72)であることが、それぞれについての解説付きで紹介され、自分と同年齢のこの人物と「ああ、しゃべりたい、話したいと、黎子は自分を抑えるのがやっとなのである」(p.72)と感じていた。

延滞利用者への督促業務については、「黎子が図書館に出向くと、同僚の山田が待ち構えたように声をかけて」きて、長期延滞者への督促を依頼されるシーンがある。「借りた本を返さない人の気持ちは、実は黎子にはちょっとわかる気がする。期限というのは、人間の意識より、いつだって早くやってくる」「コンピュータの抽出機能を使って、画面に督促すべき人を呼び出し、それを能率的に一覧表にまとめた。またたく間に、十数人の人々が現れた」(pp.122)。くだんの「須藤海太郎」もその中にあり、電話をかけたが「不在で、留守電のアナウンスが流れたので、黎子は至急、本を返すようにと、事務的な声をそこに残した」(p.123)。その後、間もなく図書館にやってきた「海太郎は、黎子の存在をただの司書としてしか気にとめていなかったし、ましてや黎子が、自分の存在を意識しているとは、つゆほども思っていない」(p.124)。同僚の山田が「『須藤さん、気をつけてくださいよ』と、いきなり言った。黎子は驚いて山田を見た」(p.126)。「実際、司書が、借り手の名前まで記憶して、人間関係を繋げていくというのは、あってもいいのに稀なことだ」「いつの間にか、須藤海太郎を待つ体制になっている自分に黎子は少し驚いた。長く司書をやっていて、誰かを待つという思いを持ったのは初めてのような気がした」(pp.128-129)という。

東日本大震災を思わせるような災害時の対応として⁸⁾、「ぐらぐらぐらっと大きな揺れが来た」「棚から本が、通

路にばさばさ落ちている」「これほどの揺れを、黎子がかつて経験したことがなかった。カウンターの外へ出てみたものの、立ってられず、床にへたり込む。揺れは長い」「『本が倒れてきて、危険です。先に、前庭へ、避難してください。わたしはみなさんを誘導しますので』自分から先に逃げるわけにはいかない」「上の棚から先に、本が落ちてきて、それらが通路に乱雑に散らばっている。館内に目立った被害はないようだったけれども、黎子は自分の無力を感じた。ただ恐ろしさに呆然として、そこに数分、立ち尽くした」(pp.135-137)。館内では、「閲覧室のテーブルは低く、なかにもぐりこめるスペースがない。館内の十数名を、とりあえず、図書館の中庭に誘導した」(p.137)というように、公務員として利用者の避難を優先的に考慮した対応をした様子が描写されている。状況の把握と、館内の安全に神経をつかい「緊急時のマニュアルを見ながら、職員のとるべき行動を確認する」「閲覧室へ行くと、途中の通路に崩れ落ちた本を、みんなが腰をこごめ拾い集めては、棚のなかへ戻している」(pp.140-141)。黎子が、利用者のおばあさんを家まで送っていく、という場面(p.144)もあった。

図書館員としての日常業務については、「月曜日は、黎子の勤務する図書館の休館日である」(p.55)のような勤務体制や、「本は重い。黎子は腱鞘炎になったこともある」(p.67)といった、具体的な業務の内容にかかわる記述もある。また、「勤めて五年。最近、ある大学の図書館から、司書として来てほしいと誘われたが、地元に住む気楽さを考え、なかなか決断ができないでいる」(p.64)といった、「司書」としての業務の専門性が、職場である区立図書館の外部から評価されていることに関係するエピソードも含まれている。

図書館に関係する人々のうち、利用者については、前半で、「本所図書館」の「来館者は、ほとんどが近辺に住む地域住民」で「黎子はここへやってくる人のほとんどと、だんだん顔見知りになってきた」(p.64)という状況が紹介される。ストーリーの後半では「図書館には、地域に住む人が頻繁にやってくる。女性は、若い人からお年寄りまで、幅のある年齢層がやってくるが、男性の場合は、退職した人が多い。女も男も、子供以外は、みな一様に静かな印象を持ち、総じて実直な人々のように思われる」「なかには少し精神を病み、救いを本の世界に求める人もいた。ここにはまず、本と人の出会いがあり、本を媒介して、人と人が出会った」(p.125)といった記述もある。

職員については、「黎子の身の回りには、失業中の中高年が多い」(p.61)「黎子の勤務先、本所図書館にも、そんな中高年の職員が、このところ入れ替わり入ってきている。入ってきて、すぐに契約が終わり、また次の人がやってくる。そしてまた、すぐに交代」。「黎子は何も力になれない。なんとかここに、働く場を得ている自分に、小さく安心するのがせいぜいだ。探しても仕事がない不安は、あらゆる世代に広がっている」(p.62)という状況であることが紹介される。同僚の山田という職員については、「ベテランの司書で、この図書館は長い」。「定年まで、数年を残した山田は、今、ゆったりと構えながら、本に関わる仕事を楽しんでいる」(p.126)という記述になっている。

黎子は、区立図書館に勤める「司書」という設定だが、その職業を意識するきっかけとして、小学校のころに利用した図書館の女性職員の存在があげられている。黎子の年齢から想定すると、40年以上前のこと(小説が連載時の同時代のストーリーであるとするなら1970年代ごろ)と推定できるが、当時の「地域の図書館」にあった「子供図書室」の「女性司書」の存在や、子ども時代の黎子に対する女性司書の対応を記憶しており、それがきっかけとなって、職業を選択している。図書館の「司書」という職業の歴史的な継続性、数十年以上前から存在してきた職業であることが示されている。一方、現在の黎子の周辺では、中高年の職員が短期間で入れ替わっていることにも言及されており、近年の図書館における流動的な職員体制の実情が、ある程度、反映されている。なお、大学図書館に司書としての転職を勧誘されているという内容もあるが、現代では、公共図書館の資料やサービスの状況と大学図書館でのそれとでは、学術情報流通の電子メディアへの移行が、一般の図書や雑誌よりも先行して進んだことなどもあって、以前よりも差が大きくなってきていて、現実には、公共図書館から大学図書館への転職は、必ずしも多くの事例が存在しているとは言えない状況である。

黎子が、実際に区立図書館で実施している業務内容については、カウンタ業務で、例外的な事例としてはあるが、ある特定の利用者が借りた本の内容が気になっている場面がある。その他には、返却が遅れている利用者への電話による督促のシーン、また、震災の際は、利用者を誘導したり、家まで送り届けたりするなど、公務員として必要と思われる業務をこなしている。

「司書」として区立図書館に勤務していて、大学図書館への転出を勧誘されるキャリアの持ち主であるというこ

とが、示されてはいるが、専門的業務内容という点については、カウンタ業務の際のプライバシーへの配慮（ただし、例外的なケースはあり）、震災時の利用者の誘導など、公務員としての基本から逸脱しない対応は描かれているが、図書館業務の専門性について具体的に示されているとはいえない。

1-4. 図書館サービスの方向性と図書館のイメージ研究

複数の女性作家が2012年に単行本として発表した小説の中の図書館、図書館員は、ファンタジー的なストーリーもあり、現実の状況とは必ずしも比較できない点もあるが、たとえば、「これからの図書館像」（2006）で示されているような、レファレンスサービスの重視や、課題解決支援サービス、付加価値をとまなうサービス、などは、今回取り上げた作者の念頭にはほとんど存在していないかのようである⁹⁾。

メディア環境の変化にともない、図書館の業務やサービス内容は変化していつている部分もあるが、『七夜物語』では、学校図書館は、子どもが本と親しみ、本を借りる場所で、司書は児童を見守る存在であり、学校図書館を活用した授業実践や総合学習などは想定されていない¹⁰⁾。区立図書館は『七夜物語』という特殊な本を所蔵していて、メインキャラクターがそのストーリーの中へ入り込んで行く、ファンタジー世界への入口であり、学習室が存在することは紹介されているが、学校図書館では「司書の西先生」が登場していたのに対して、職員の姿は描写の対象となっていない。『ダンスウィズドラゴン』では、古く壮大な建物、広大な読書室、古く貴重な資料群（この世に存在しない動物、龍に関する資料）、夜間の時間帯のみ開館、など、特殊な図書館の状況が描かれる。ファンタジー的なストーリーではあるが、過去の図書館がもっていた、少数の人々のみが利用する施設、というイメージを背景にした構成になっている。『厩橋』は、後半には、東日本大震災をおもわせる、大規模災害時の図書館の描写も含まれており、現代の図書館状況に近い内容が描かれている。図書館に対する認識と、作家が作品に描く図書館像とは必ずしも重なるものではないが、『厩橋』には、現実の図書館の状況が、ある程度反映されているといえよう。

川崎良孝（日本図書館研究会理事長）は、その機関誌『図書館界』の巻頭に掲載される「座標」において、図書館研究について、「『利用者から』図書館をみることによって、図書館や図書館専門職が価値を置くことと現実との齟齬、あるいは通説とされていることの捉え返しが可能になり、図書館へのいっそう豊かな理解が可能になると思われる。そうした方法論的な検討に、図書館研究は力を入れるべきであろう」と述べている¹¹⁾。

こうした「利用者から」みた図書館研究の方向性の一つとして、メディアにおける図書館の取り上げられ方を検討する手法が存在する。今回、本稿では、2012年4月～6月に放映された、テレビドラマ『もう一度君に、プロポーズ』をとりあげ、2000年代の連続テレビドラマで、図書館員がキャラクターとして登場していた作品の分析とあわせて、図書館や図書館員に対する見方が、どのようになってきているかについて、検討した。インターネットの社会的な定着や電子書籍の携帯用読書端末の普及、地方財政の悪化などの影響により、図書館を取り巻く環境が激変し、図書館の施設・設備やサービス内容も変化している。そうした状況がテレビドラマに登場する図書館や図書館員の描かれ方に、変化をもたらしているのかどうかについて、考察した。

2. 2000年代の連続テレビドラマにおける図書館員

「図書館はどうみられてきたか」というテーマで、メディアにおける図書館の描かれ方について検討してきたが、その中で、2000年以降、地上波で連続テレビドラマとして放映された作品については、以下のものを扱ってきた（ドラマのタイトル、放送年月、放送局、図書館のシーンが撮影された場所、を示す）。

- ①『ビューティフルライフ』2000年1月～3月 TBS スタジオセット¹⁾
- ②『いま、会いにゆきます』2005年7月～9月 TBS 辰野町立小野図書館（長野）
- ③『白夜行』2006年1月～3月 TBS 神奈川近代文学館 三浦市図書館初声分室（神奈川）²⁾
- ④『魔王』2008年7月～9月 TBS 秦野市立図書館（神奈川）
- ⑤『ラブレター』2008年11月～2009年2月 TBS 福生市立中央図書館（東京）³⁾
- ⑥『もう一度君に、プロポーズ』2012年4月～6月 TBS 北区立中央図書館（東京）

⇒（本稿、以下の章で扱う）

それぞれのドラマで、図書館に勤務するキャラクタ(演じた俳優の名前)の設定は、以下のようであった。

①の常盤貴子は、車いすで生活で生活しており、免疫不全と思われる病気で、最終回では死去してしまう⁴⁾。また、図書館は、利用者が少なく、ヒマだということを示すエピソードが複数存在する。たとえば「ヒマだねえ。ヒマなのに寝ちゃいけないって、ゴーマンだね」とヒロインが言っているシーン(第1回)や、事前の予告も無くアメリカ西海岸に2週間も出かけてしまい、兄が心配して、自分もついていけばよかった、といったのに対して、父は「じょーだんじゃないよ。2週間も店、あけられたら、こっちは区立図書館じゃないんだからあがったりだよ」(第4回)と言っている場面がある⁵⁾。

②の成宮寛貴は、体調や精神的な面で不安定な状態にあり、乗り物が苦手な移動図書館車には同乗できず、あとを自転車で追いかけて対応する。体調が不安定で、9時から4時までしか働けないことで、職を失いかねない状況になるが、周囲の応援で何とか、職を続けられることになる⁶⁾。

③の余貴美子は、メインキャラクタの男女がメッセージを交換する場である図書館に勤務しており、ヒロインたちを見守る役柄として設定されている。『白夜行』の小説や映画には登場しないキャラクタである⁷⁾。

④は、韓国ドラマの翻案であり、ヒロインの小林涼子は、サイコメトラーという特殊な能力の持ち主である⁸⁾。

⑤の鈴木あみは、難聴であり、他者とのメッセージの交換は主に手話によって行われている。養母が入院したことを知らされると「びっくりしたから、一週間も休みもらっちゃった」というように親の急病が理由であるとはいえず、突然、一週間、休暇をとって実家に帰るシーンがある(第47回)。ドラマの終盤では、ヒロインが手話で、プロポーズされるという感動的な場面もあるが、それは図書館の勤務時間中のことである。(最終回=第60回)⁹⁾

③は、ヒロインではなく、狂言回しのキャラクタであり、④は韓国ドラマの翻案で、サイコメトラーという、存在自体が特殊な設定である。これらを除くと、①②⑤のメインキャラクタに設定されている図書館員は、体調になんらかの不具合をかかえている。

①車いすで生活し、日常的に通院・投薬が必要 最終的には病状の悪化により死亡

②体調不良により通常の勤務に耐えられない

⑤難聴であり、他者とのコミュニケーションは手話で対応する

ハンディキャップのある人材に職が解放されていること自体は、望ましいことだが、ヒマであることが強調され、それに対して、とくに不自然とも、そのことが施設や職員の状況に影響することも描かれていない。図書館とは、そのような職場であり、図書館員はそうした社会的な存在である、というストーリーを展開しても、違和感をもつ人は少ないだろうと、ドラマの製作者がわに、みられているということではないか。

3. 『もう一度君に、プロポーズ』

『もう一度君に、プロポーズ』は、2012年4月～6月、TBS系列で放映された¹⁾。和久井映見が演ずる、宮本可南子は、図書館に勤めているが「クモ膜下出血」により、仕事にたおれてしまい、意識は回復するものの、五年あまりの間の記憶を失ってしまっている、という設定で、竹之内豊が可南子の夫(宮本波留)、勤務先の図書館関係では、杉本哲太(区立図書館長)、橋本真実(佐伯=女性職員)、他に数名の職員が登場する。

3-1. 撮影に使われた図書館施設と図書館職員としてのヒロイン

「撮影協力」として、番組の中で表示される、「北区立中央図書館」(東京都北区)は、JR王子駅から徒歩15分程度の距離の場所に、2008年にオープンした施設で、日本図書館協会が制定する「図書館建築賞」(2011年・平成23年度)を受賞している²⁾。

ヒロインが初めて夫となる人物に出会うシーンでは、図書館の近くの公園で、絵本の朗読会の練習をしているところに、「保母さん?」と、尋ねられる(第1回)。絵本の朗読=子供を対象にした職業、ということで、保育士や幼稚園教諭のほうが、一般の人にとって、より、念頭に浮かびやすく、メジャーな職種であるということがこの発言の背景にあると思われる。このときは、「そこの図書館で働いてるんです。絵本の朗読会の練習をして」とこたえている。図書館の勤務については、ヒロインの夫が「土日が休みとは限らないだろ。図書館は」(第

6回)といている場面がある。

図書館の業務に関するシーンとしては、図書館のフロアで、ヒロインが男性職員に「先輩、これって、どこの本棚なんでしたっけ」と尋ねられて「この番号は、閉架資料だから、3階」(第1回)と回答する場面が、冒頭にあり、ドラマのラストシーンに近い部分(第10回=最終回)にも、ほぼ同じようなシチュエーションで、同様の会話が繰り返されている。図書館業務で、利用者の目につきやすく、わかりやすいのがこの作業であるということか。

3-2. 朗読会

和久井映見が演じるこのドラマのヒロインが、図書館で取り組む業務の中で、ある程度専門的な仕事という扱いで、一定の業務上の評価につながっていると思われるのが、図書館で開催される「朗読会」である。

ドラマの冒頭近くでは、その日、絵本『いばら姫』の朗読会を実施する予定で、自宅で、ページごとに内容の要約を記載した進行表を、確認するシーンがある。その後、図書館の児童コーナーで、ホワイトボードに「子どものための朗読会『いばら姫』」という掲示があり、シートの上に子どもが十数名、すわっている前で、絵本を見せながら、朗読しているが、途中で、頭をおさえながら、たおれてしまう(第1回)。

図書館でたおれたあと、意識は回復するが、五年あまりの記憶を失ってしまい、退職するか復帰するか迷っているヒロインは、図書館に出かける。「4月の朗読会 4月15日」という案内パンフレットを手にとって、広げてみつめていると、館長から「宮本さん、見に来たんですか」と声をかけられ「ええ。楽しそう」とこたえる。朗読会を毎月実施するようになったことについて、館長から「誰のおかげだと思います?」「幼稚園や小学校にあいさつして回って、お客さん集めたり、区に予算について。かけあったり、それでようやく、毎月の恒例行事になったんです」「わたしじゃないですよ。全部、宮本さんが、やってくれたんです」という経緯をきかされ、もういちど、図書館の職場へ復帰しようと判断するきっかけになっている(第2回)。

図書館業務に復帰したヒロインは、次の朗読会に取り組む。館内には「5月の朗読会『蛙のゴム靴』」と掲示が出され、図書館の児童コーナーで実施するが、子どもは5人くらいしかいない。大型絵本を、子どもに見せながら朗読し、会の終了後、あと片付けをしていると、女の子2人が「あの一、ありがとうございました」「たのしかったです」と言ってくる。「復帰第一戦、おつかれさまでした」「緊張しましたが、なんとか」「完璧でしたよ、可南子先輩」「来月もよろしくお願いします」という同僚とのやり取りの後、会に来る子どもが少なくなっている状況に対して、図書館フロアのパンフレット置き場で、5月の朗読会のパンフレットを見ながら、「ポスターとか、つくったらどうですかね」と図書館長に提案する。さらに「近所の幼稚園や保育園に配ったほうが、いいと思うんです。そうすれば、お客さん、集まるんじゃないですかね」と発言する。館長は「ナイスアイデアですよ、宮本さん」「本領発揮ですね」「おまかせしましょう、宮本さん。思う存分、やっちゃってください」と賛成する。閉館後、図書館内の机で切り絵のポスターを制作しているところへ館長があらわれ、「やるべきことを、どんどん見つけて、小さなことにも、喜びをみいだす。だから、まかせておいても、一人で何でもできちゃうんですよ、宮本さんは。そういうところ、周りの職員たちにも、いいお手本でした」「だけど、無理は禁物ですよ」と以前の仕事ぶりももちだして、激励する(第7回)。

図書館の開催する行事に関して、対外的なアピールは必要と思われるが、一方で、この時点までは児童関係施設への案内をしていなかったのか、という疑問も生じる。この程度のことを提案しただけで、大げさに賞賛されるという扱いは、病気から職場へ復帰する途上であることを差し引いても、それだけ図書館職員に対する期待値が、相当に低いものなのではないかということを考えさせられる。

朗読会『ハーメルンの笛吹き男』のポスターが完成し、ヒロインは館長といっしょに近隣の児童関係施設を訪問し、朗読会の実施をアピールし、参加を勧誘する(第8回)。さらに、朗読会実施にむけて、図書館の児童コーナーで、「今度の日曜日に、絵本の朗読会をやります。『ハーメルンの笛吹き男』だよ」といって、子どもに、パンフレットを手渡すシーンもある。朗読会の当日は、図書館玄関に大きな立看板が設置される³⁾。図書館長は「今日の朗読会、いよいよですね。あれだけ宣伝したんだから、たくさん、集まってほしいですね」といい、開始前に、子どもが20数名程度集まっているのを見てガッツポーズをする(第9回)。

児童を対象としたサービスに関係する行事は、現在、多くの公共図書館で頻繁に実施されている。たとえば、

このドラマの撮影が行われた東京都北区立図書館でも、中央図書館をはじめとして、各分館でもこうした行事を実施していることが、ホームページの行事案内で告知されている⁴⁾。ドラマでは、1冊の絵本を朗読するだけの「朗読会」を「月1回」開催し、その告知に、館長と職員が案内ポスターをもって、児童関係施設を回っている。もちろんそれらの施設を図書館員が訪問し、その職員と対面することで直接的なコミュニケーションをはかることにより、人間的な交流が深まるというメリットはあると考えられるが、人件費をはじめとするコストの圧縮が求められている現状では、ホームページでの告知のようなコストのかからない方法が取られることの方が現実的ともいえる。

3-3. 図書館業務への対応

このドラマのヒロインは、病気が原因で、五年余りの記憶をなくしてしまったという設定で、その間に起きた変化にとまどっている場面がある。図書館の仕事に復帰した後、カウンタ業務をしていると「ネットで予約をしたんですけど」という利用者があらわれ、モニタ画面をみながらコンピュータを操作してもうまくいかず、「少々お待ちください」といって、フロアで書架整理をしている、顔見知りの男性職員をみつけて対応を依頼する。このことがきっかけとなって、記憶の空白期間を回復しようとヒロインが努力していく展開となる(第3回)。

閉館後、マニュアルを参照しながら、コンピュータを操作していると、館長があらわれ、「宮本さん、そろそろ閉めますよ」「すみません。新しいシステム、早く、覚えなきゃと思って」「難しいですよ。ここだけの話、私もまだちゃんと使いこなせてないですよ」という会話をしている(第3回)。

また、やはり、閉館後に、過去の新聞記事を、コンピュータ操作によって、閲覧しているシーンもある。新聞(架空の紙名)の紙面をモニタに表示させ「リーマンショック」「裁判員制度」「民主党 政権交代」「東日本大震災」などの記事を参照している。夫である波留のことも思い出せていない状態だが、「五年分、全部、読むつもり?新聞」ときかれ、「あ、はい。ちゃんと、向き合おうと思ってます。いろんなことに」と回答している⁵⁾(第3回)。

実家では、データがプリントされた紙をみながら「はやりの作家ぐらいは、チェックしとかないと、と思って」といっているシーンもある。これは、「2009年度 図書館図書目録」というもので、「版元 ISBN 書名 作家」(画面に映る書名は小説のみ)が表示されており「2009年度」「2008年度」「2007年度」の各年度が1枚の紙にリストになっている(第3回)。

①ネット予約への対応も含め、コンピュータによる業務処理について、マニュアルを参照しながら覚えようとする、②数年分の新聞記事を参照し、この間の出来事について知識を得ようとする、③記憶の空白期間に刊行された小説のリストを参照し、人気のある作家について、情報を取り入れようとする、という対応をしていくことで、失った5年間の記憶を補完し、日常の業務に対応しようと努力する、というストーリーである。

3-4. 図書館職員としての設定の意味

のちに夫となる人物と付き合い始めた頃のデートで、「趣味は?」と聞かれ「読書です」とこたえていたり(第1回)、同じ相手と「ずっと、本ばっか、読んでたの?」「何ですか、その偏見」「違うの?」「違わないけど。何か、バカにしてませんか?」という会話をしている。やはり、図書館員=本が好き、というイメージが強くあるということか。このあと、ヒロインは「うちの図書館だけでも、25万冊もあるんですよ」「1日1冊読んだって、死ぬまでに読み切れませんよ」「1冊でも多く、いい本に出会いたいし、ほかの人にも、素敵な本に出会ってほしいんです」と、あつく語っている(第2回)。

病気でたおれたあと、職場に復帰するかどうか迷うヒロインに、夫は「すぐには無理でもさ、しばらく休みをもらってからでも、また、働いてみたら?」「もったいないと思うけどなあ。好きだろ、図書館の仕事」と話しかけるが、「自分でもわからないんです。どうしたらいいのか」とこたえている(第3回)⁶⁾。

最終回(第10回)では、平成16年4月「図書館だより」に掲載された「新館長のあいさつ 大橋和典より」が紹介される。「やあ、みんな! 大橋です! 本年度から、館長に就任しました。愛と平和と娯楽と教養のために、図書館を盛り上げていくので、ヨロシクネ。♪ 北区中央図書館で、僕と握手!」とあり、職員は「ショーゲキですね」「あたしも、これ、読んだ時、びっくりしました」という受け止め方をしているが、館長は「まあ、

このころは、このころなりに、がんばっていたわけですね。かわいいじゃないですか、未熟な自分も。こういう過去も含めて、私ですからね」と話す。図書館長がこのような気軽な利用を呼びかけるコメントを「図書館だより」に掲載していることで、視聴者に意外性をアピールしようという意図が感じられる⁷⁾。

4. 図書館と図書館職員－そのイメージの現状と問題点

小説やテレビドラマなどはあくまでもフィクションであり、その作品での取り上げられ方について、問題点を指摘してもあまり意味がないのでは、というみかたもあるだろう。一方で、『もう一度君に、プロポーズ』の放送では、「医療監修」として個人名が、「自動車監修」として、個人名と団体名が、番組中に表示されている¹⁾。ドラマの中での病気やその治療法、心療内科での医師とのコミュニケーションの場面など、医療分野に関するストーリーや、ヒロインの夫の勤務先である自動車工場での場面には、一定の専門的見地からの助言が必要と認識されているということである。図書館については、そうした点について、注意が払われたという形跡は、放送された画面からは感じとることができなかった²⁾。先に指摘したような、ほかの職業に対するのと同様の配慮は、図書館については必要ないとみられているということではないか。

今回取り上げた小説やテレビドラマの中に登場する図書館のイメージは、必ずしも悪いものとはいえないが、新しいメディア状況への対応や将来的な可能性を感じさせる要素が少なく、むしろこれまでの図書館が築き上げてきた資産に寄りかかっているともいえよう。

図書館の現場では、「1. はじめに」でも記したように、構造的な変化が起きており、「これからの図書館像」では、「改革が始まっています」との記述も見られる³⁾。一方で、そうしたことは無縁の、これまでと同様のイメージで、フィクションの作品に描かれた図書館が、2012年の時点でも、当然のように存在している。

電子書籍の端末は、まだ普及途上であるといえるが、臨界点を超えれば急速に普及して行くとの見方もあり、それは公共図書館のサービスにも少なからぬ変化をもたらすだろう⁴⁾。一方で、図書館の職員体制は、業務委託などの進行により、弱体化しつつある部分があることは否定できない。それに対して、利用者は、委託に反対する見解が必ずしも多数を占めているわけではないとする調査結果も発表されている⁵⁾。「利用者から」みた図書館や図書館職員のイメージが、専門性や広範な知識をあまり必要としないものであるとするならば、こうした傾向は今後も多くの地域で定着してしまうのではないか。

注

1. はじめに－文芸作品における図書館に関する記述の事例：女性作家の描く図書館・2012

1) みすず書房ホームページの「著訳者一覧」では、「宮田昇」について、次のように、記述されている。

1928年東京に生まれる。早川書房編集部、チャールズ・E・タトル商会著作権部を経て、1967年、日本ユニ・エージェンシー創設、元代表取締役。1991年、日本ユニ著作権センター創設、元代表理事。

(<http://www.msz.co.jp/book/author/15052.html>)

佐藤毅彦「2011年、東日本大震災の年に、図書館はどのように描かれたか 映像メディアとコミック・文芸作品に登場した図書館・図書館員に関する事例研究」『甲南国文』vol.59, 2013, p.21, において、下記のように、記載した。

「図書館に通う」についての論考は、「図書館はどうみられてきたか・13」として、『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.49, 2013, に、投稿を予定している。

「図書館に通う」が、2012年10月現在も、『みすず』に連載中であることなどを考慮して、本紀要では、今回のタイトルにあげたテーマを扱うこととした。

2) 辻由美『図書館であそぼう 知的発見のすすめ』講談社現代新書, 1999, では、執筆当時の日本の図書館状況や利用するがわからみた図書館の活用法、著者が訪れる機会が多いフランスの図書館事情、などについて記載されている。

3) 大谷卓史 吉備国際大学国際環境経営学部准教授 専門分野：科学技術史・情報倫理学

(<http://kiui.jp/pc/kokusai/kankyo/teacher.html>)

4) 川上弘美『七夜物語 上』朝日新聞出版, 2012. 5

川上弘美『七夜物語 下』朝日新聞出版, 2012. 5

川上弘美は、1958年生まれ。お茶の水女子大学卒業。『蛇を踏む』で、1996年上期、第115回芥川賞を受賞。2000年、『溺れる』で、第39回女流文学賞、2001年、『センセイの鞆』で、第37回谷崎潤一郎賞、2006年、『真鶴』で、第57回芸術選奨文部科学大臣賞（文学部門）、などの受賞歴がある。第137回より、芥川賞選考委員をつとめている。

5) 村山由佳『ダンスウィズドラゴン』幻冬舎, 2012. 5

村山由佳は、1964年生まれ、立教大学卒業。『星々の舟』で、2003年上期、直木賞を受賞。2009年、『ダブルファンタジー』で、第4回中央公論文芸賞、第22回柴田錬三郎賞、第16回島清恋愛文学賞を受賞している。

6) 小池昌代『厩橋』角川書店, 2012. 2

小池昌代は、雑誌『図書館の学校』に掲載された、巻頭エッセイの中で、当時の公共図書館における「複本購入問題」について、「ある図書館では、人気作家の話題作などは、同じものを一度に五冊くらいそろえていた。こういうことは、貸しビデオ店では、当たり前に行われることだが、公共施設で行われているとは意外だった。読みたい人が殺到する時期を過ぎたら、五冊の揃えは無駄にもなるはずだ」と述べている。出典は、次のとおり。

小池昌代「図書館のことを何も知らない」『図書館の学校』No.012, 2000.12, pp.12-15

また、子どものころの図書館とのかかわりについて、エッセイ集の中で「学校がひけると、そこから少し歩いたところにある区立図書館へ行く。そのなかに、未整理の古い書庫があり、閉架式になっていた」(p.58)同級生が「校内誌に発表した詩とまったく同じ詩を、ある書物のなかに偶然見つけたのも、この書庫のなかであった」(p.59)というエピソードを紹介している。出典は、次のとおり。

小池昌代「書庫と盗作」『屋上への誘惑』光文社(文庫), 2008. 1, pp.58-61←岩波書店, 2001. 3

小池昌代は、1959年、東京江東区深川生まれ。1982年、津田塾大学卒業。法律関係の雑誌の編集に携わったかわら、詩作にとりくみ、1999年、『もともと官能的な部屋』(書肆山田)で高見順賞受賞。2001年、エッセイ集『屋上への誘惑』(岩波書店)で、講談社エッセイ賞受賞。その後、小説の創作にもとりくみ、2007年、短編「タタド」(新潮社)により、川端康成文学賞を受賞している。また、この間、立教大学文学部特別任用教授として学生の指導にもあたっている。出典は、次の通り。

「小池昌代オフィシャルサイト」(<http://www.neobreathe.co.jp/koike/koike.html>)

2010年には、『コルカタ』(思潮社)で、第18回萩原朔太郎賞を受賞している。

7) 「司書」という言葉は、現在は「資格」の名称、職場における「職名」、のほかに一般的に図書館に勤務する職員を表す言葉としても使われている。東京23区の区立図書館では、「職名」としての「司書」は廃止されて久しく、区立図書館に勤務している職員が、司書資格を有しているとは限らない状況である。

「らんだむ批評 司書の役割は大きいのに」『毎日新聞』1996. 3. 8(夕刊), p.10, では、東京23区での状況について、紹介している。

山口真也「図書館員はどう呼ばれてきたか? -おねえさん・オバちゃん⇒司書⇒国家資格 図書館ノート19」『みんなの図書館』no.426, 2012. 10, pp.53-59, では、「漫画の中で図書館員がどのように呼ばれているか」「データをとっておいた」(p.54)「図書館員が専門的職業であるというイメージが広がって行く中で」「資格制度について書かれた部分に〈間違い〉や〈誤解〉がけっこう多い」(p.58)ことが、指摘されている。

8) 『厩橋』の奥付には、「本書は、『野生時代』2011年10月号、同年12月号、「デジタル野生時代」第4号、第9号に掲載された小説に、大幅な加筆修正を加えました」と、記されており、東日本大震災(2011年3月11日)の罹災後に構想され、記述されたことが示されている。

9) これからの図書館の在り方検討協力者会議・編「これからの図書館像-地域を支える情報拠点をめざして-」2006

「2. これからの図書館サービスに求められる新たな視点」では、「レファレンスサービスの充実と促進」「課題解決支援機能の充実」「紙媒体と電子媒体の組み合わせによるハイブリッド図書館の整備」などがあげられている。

10) 『朝日新聞』2013年10月7日(日曜日・朝刊), p.10, は、全国図書館大会が島根県で開催されることに関連した、広告特集のページであるが、島根県溝口善兵衛知事は、「島根県では4年ほど前から学校図書館の充実に取り組んで、学校司書を増やしたり、本を利用したカリキュラムを組んだ」ところ、「子どもたちも大勢、朝から図書館に来て本を借りていくように」なったとコメントしている。

11) 川崎良孝「図書館という空間と図書館研究」(座標 May 2012)『図書館界』vol.64, no.1, 2012. 5, p.1

2. 2000年代の連続ドラマにおける図書館員

1) 佐藤毅彦「テレビドラマ『ビューティフルライフ』における“図書館”観の批判的検討-図書館はどうみられてきたか・2-」『甲南女子大学研究紀要』Vol.37, 2001. 3, pp.105-135

2) 佐藤毅彦「2005年の図書館“員”像 ベストセラー小説のテレビドラマ化で図書館はどのように描かれたか『いま、会いにゆきます』『白夜行』のケースについて」『同志社大学図書館学年報』Vol.32 別冊, 2006. 7, pp.17-43

3) 佐藤毅彦「『Post-War』(『図書館戦争』)時代の図書館イメージ テレビドラマ『魔王』『ラブレター』のケースについて」『同志社大学図書館学年報』Vol.35 別冊, 2009. 7, pp.21-41

4) ノベライゼーションでは、「『月に一回病院行って、検査して、食後三回薬飲んで』」(p.49)「『あの子の病気はね、免疫不全の病気で悪くなる可能性』がある」「『どれくらいの確率かっていうと』『お医者さんが言うには43分の11だ』」(p.231)「レントゲン写真」で「肺のあたりに」「影ができていく」(p.262)などの記述がある。出典は次の通り。

北川悦吏子、ノベライズ: 百瀬しのぶ『ビューティフルライフ』角川書店, 2000

同書の奥付には「『ビューティフルライフ』のシナリオを元に小説化したもの」と記されている。

- 5) 佐藤毅彦「テレビドラマ『ビューティフルライフ』における“図書館”観の批判的検討－図書館はどうみられてきたか・2－」『甲南女子大学研究紀要』Vol.37, 2001. 3, pp.117-118, でこの点を取り上げている。
- 6) 佐藤毅彦「2005年の図書館“員”像 バストセラー小説のテレビドラマ化で図書館はどのように描かれたか『いま、会いにゆきます』『白夜行』のケースについて」『同志社大学図書館学年報』Vol.32 別冊, 2006. 7, pp.23-24, でこの点を取り上げている。
- 7) 同上, pp.27-28
- 8) 佐藤毅彦「「Post-“War” (=『図書館戦争』)」時代の図書館イメージ テレビドラマ『魔王』『ラブレター』のケースについて」『同志社大学図書館学年報』Vol.35 別冊, 2009. 7, pp.24-25
- 9) 同上, pp.29-32

3. 『もう一度君に、プロポーズ』

- 1) 脚本を、メインで担当しているのは、桐野世樹。平均視聴率は、8.6% (ビデオリサーチ・関東地区)。

結婚している男女の女性のほうが記憶を失ってしまうという設定について、日本では、2012年6月に、公開された、映画『君への誓い』と類似しているという指摘もある。映画のストーリーは、実話に基づいているといわれるが、女性の職業は、図書館員ではない。

職員として、図書館に勤務しているという設定で、下記のような、本人の保険証が画面に映される(第2回)。

| | | |
|----------|-------------------|-----------------|
| 保険証 | 本人 | 平成22年4月1日交付 |
| 被保険者証 | 記号 | 北区 番号 0892-7664 |
| | | ミヤモト カナコ |
| 氏名 | 宮本 可南子 | 性別 女 |
| 資格取得年月日 | 平成22年4月1日 | |
| 発行機関所在地 | 新宿区西新宿8-10-1 | |
| | 東京都庁第九本庁舎南棟 | |
| 保険者番号・名称 | 34130012 東京職員共済組合 | |

- 2) 北区ホームページの「中央図書館受賞歴」のページでは、「第27回日本図書館協会図書館建築賞」について、「受賞日平成23年10月23日」「表彰機関 日本図書館協会」であることが示され、さらに
 1. 図書館建築賞とは…この賞は、「優れた図書館建築を顕彰し、それを広く世に知らせることによって、図書館建築の質の向上を図ること」を目的として定めるものです。優れた図書館建築とは、建築の質はもとより、そこで展開されているサービスもよく行われていることが条件となります。
 2. 受賞のポイント…中央図書館は、歴史的建物を保存し、随所に魅力ある図書館づくりが見られること、区民の活動と協働することを実践していることなど、開かれた姿勢が高く評価されました。全国から、視察、見学、雑誌、ドラマの撮影などで多くの方が図書館に訪れています。これからも永く皆様に愛される図書館をめざしてまいります。
 と解説されている。

放映された画面の中では、撮影協力「北区立中央図書館」と表示されている。「北区」は、名古屋市、大阪市、神戸市などの政令指定都市にも見られる区の名称だが、区内に複数の図書館が存在し、北区立中央図書館が存在するのは、東京都北区のみである。
- 3) タテ180～200cm, ヨコ50～70cm程度の大きさの看板であると推定できる。

タテ書きで「こどもの朗読会『ハーメルンの笛吹き男』場所：2階・児童コーナー」と表記されている。
- 4) たとえば、ロケが行われた「北区立中央図書館」では、「2012北区立図書館行事案内リスト」によって、「おはなし会・読み聞かせ」「赤ちゃんのためのおはなし会」が、毎週のように実施されていることが確認できる。ホームページでも公開されている『北区図書館情報 ぼけっと』平成24(2012)年10月号には、行事予定が掲載されている。それによると、北区立中央図書館では、

「おはなし会・読み聞かせ」毎週土曜11時(幼児向), 6(土)・20(土)14時30分(幼児向), 6(土)・20(土)15時(小学生向), 13(土)14時30分(紙芝居), 「赤ちゃんのためのおはなし会」8(月)・22(月)11時, 27(土)10時

が実施されることが示されている。毎週のように、対象となる年齢層のカテゴリをわけて、児童むけのこの種の行事が実施されていることがわかる。

なお、分館では、「おはなし会・読み聞かせ」「赤ちゃんのためのおはなし会」を、それぞれ、月1回開催、というケースが多い。
- 5) 閉館後のことであるが、電気代や残業手当などはどう処理しているのか、コスト感覚という点から、こうした対応には懐疑的なみかたもできる。
- 6) ドラマの設定として、日常的に職につくことをめぐる環境が厳しくなっている現実の状況の中で、約五年間分の記憶を失ってしまっても、少し休んで努力すれば、何とか復帰することが可能である職場として、図書館が選ばれた、という考え方もできるのではないか。
- 7) 実際の区立図書館での管理職ポストの職員は、数年で異動することが多く、長期にわたって館長を務めるケースは少な

い。このコメントには、親しみやすさを感じられるが、図書館がどういうサービスをめざそうとしているのかについては、必ずしも明確に示されているわけではない。

4. 図書館と図書館職員－そのイメージの現状と問題点

- 1) 「医療監修」として、個人名が、毎回、表示された。「自動車監修」としては、個人名と「東京工科大学自動車大学校」が、第 9 回、第 10 回、に表示された。

佐藤毅彦「テレビドラマ『ビューティフルライフ』における“図書館”観の批判的検討－図書館はどうみられてきたか・2－」『甲南女子大学研究紀要』Vol.37, 2001. 3, p.122, では、テレビドラマ『ビューティフルライフ』において、「『医療監修』『ヘアークット指導』は個人名が表示されるのに対して、図書館については、そうしたたぐいのものは存在しない」ことを指摘した。

佐藤毅彦「2005 年の図書館“員”像 ベストセラー小説のテレビドラマ化で図書館はどのように描かれたか『いま、会いにゆきます』『白夜行』のケースについて」『同志社大学図書館学年報』Vol.32 別冊, 2006. 7, p.30, では、「テレビドラマで演じられる職業について」当時放映されたドラマに看護師役で出演した石原さとみが、「とにかくリアルに演じなくてはいけないと思っています。だから、細かい動き、セリフ、患者さんにかかるちょっとした言葉など、全部看護師の方に確認を取りながら演じてます」「実際の医療研修に行って、血圧を測ったりとか、点滴を入れたりとか、看護師の基本を勉強してきました」とコメントしていることを紹介した。

- 2) 佐藤毅彦「2011 年、東日本大震災の年に、図書館はどのように描かれたか 映像メディアとコミック・文芸作品に登場した図書館・図書館員に関する事例研究」『甲南国文』vol.59, 2013, p.15, において、2011 年に刊行された、コミック『夜明けの図書館』では、作者が「レファレンス講座に参加したり、司書さんを質問攻めにした」とコメントしていること、同じく、コミック『図書館の主』では、「取材協力」として「千代田区立千代田図書館」「国立国会図書館」があげられていること、を指摘した。

- 3) これからの図書館の在り方検討協力者会議・編「これからの図書館像－地域を支える情報拠点をめざして－」2006, p.1, 「はじめに」の冒頭部分で、「図書館では、今、改革が始まっています。改革を始めた図書館では、司書が様々なデータベースを検索し、図書だけでなく、雑誌記事、新聞記事、インターネット上の情報等多様な資料や情報を利用者に提供しています」と記述されている。

- 4) 「電子書籍『読みたい』30% すでに『読んでいる』が5% 端末「3千円」「5千円」なら4割 本社世論調査」『毎日新聞』2012 年 10 月 13 日, p.10, に掲載された、植村八潮 (出版デジタル機構会長・専修大学教授)「新しい世代が新しい文化を生む」では、「紙の本で読書の喜びを覚えて、たくさん読んでいる人ほど拒否感があるとみています」「紙の本に強い愛着がある人は、これから先も紙の本を読み続けるでしょう」「電子書籍は浸透するまで時間がかかりますが、一度主流になれば、二度と紙の時代には戻りません」との指摘がなされている。

- 5) 長尾真 (寄稿) 前国立国会図書館長「期待高まる地域拠点未来の公共図書館像 電子情報で格差解消へ」『毎日新聞』2012 年 10 月 27 日, p.11, では、日本の公共図書館が大きな曲がり角に立っており、「地域における図書館の在り方」「スマートフォンなどの情報獲得や読書が一般的になってきている時代にどう対応してゆくか」を課題としてあげている。「指定管理者制度」については「単に図書館運営費を削減できるからといった理由で判断すべきことではない」としている。

一方、「図書館委託 支持 5 割強 利便性の高まりに期待」『毎日新聞』2012 年 10 月 26 日, p.15, では、「第 66 回読書世論調査」で「公共図書館の民間委託について 55% の人が肯定的な回答をした」として、来年度から佐賀県武雄市が予定している「TUTAYA」の運営会社への運営委託をその典型と紹介している。ただし、この 1 年間に図書館利用経験のない人では、「民間委託への支持 (58%) が不支持 (35%) を大きく上回った」「利用経験がある人では支持 49%, 不支持 48% と拮抗した」ことも紹介されている。

後藤暢は、毎日新聞のこの記事について「新聞記事でしばしば両者が混同されている。この調査にいう『委託』も指定管理を指すと思われる」と紹介し、「図書館運営の劣化が先にあり、そこへ指定管理者を導入すると、いかにも運営が改善したように見える」「指定管理者のもとで働く職員には、司書の仕事に就きたいがために雇用されている人も多い。専門職としての意欲が高ければ、仕事に反映する。一定期間はその成果が現われるが、定着率の不安定さは避けがたい。しかし利用者には、そのような事情はすぐには見えないから、単純比較で『指定管理者の方がサービスが良くなった』という反応が出てくるのはむしろ当然である」と論述している。出典は、次のとおり。

後藤暢「図書館行政の不在・劣化の中で 市民参加の図書館中期計画」『出版ニュース』2012. 12 月中旬, pp.4-7

また、上林陽治は、非正規公務員の実例として、「『図書館』で働く人たちの非正規化の実態と問題点」として「図書館サービスにおける臨時・非正規職員化の経過と実態」「急速な図書館員の非正規化」などを、紹介している。出典は次のとおり。

上林陽治『非正規公務員』日本評論社, 2012, pp.38-47

(本文中で参照した web ページは、2012 年 10 末の時点で、公開されていた内容です)